

【完全を目指す パート2】

私達は強制的に流れる時間の中に生きています。そしていつか必ず「肉体の死」を迎えます。私達は一秒刻みで、死に向かっているのです。

人生を旅に例えるなら、その目的地が必ず必要です。さて、私達が目指すべき所、目的地は一体どこなのでしょう？

脳大成理論では私達を目指す方向は「なりたい自分」「ありたい自分」であり、それは『善・親切・可能性』の延長にあると定義しています。しかし、具体性を定義付けることは不可能です。人それぞれの状況があり、詳細を定義できないのは当然のことであり、詳細を定義するのはいささか無理があります。人それぞれの状況に合わせて具体的な事象は変わるでしょう。しかし、方向としては統一的に提示でき得るものであり、また全体観としてバラバラであるのは問題があります。今回は私達が目指すべき方向、目的地について精神論の視点から言及していきます。

さて、あなたはなぜ学んでいるのでしょうか？

時間を費やし、費用を費やしてまであなたはなぜ学んでいるのでしょうか？

例えば、「その日だけしか見えない人間」という人がいたとします。あなたは休日で、ダイエットを目指しジムに通い、そして帰宅してから資格を取るために勉強をしていたとしましょう。あなたにとって、ジムでのトレーニングも資格取得のための勉強も決して楽しいモノではありません。そんなあなたを見て「その日だけしか見えない人間」はこう言います。「そんなに大変な思いをするくらいならやめてしまえばいいじゃないですか？もっと自由に好きなことをやって、もっと人生を楽しんでください。だって、あなたは苦しむためにうまれてきたんじゃないですよ…幸せになるために生まれてきたんですから…」

こう言われたとしてどうでしょうか？

このような論調は、かたよったスピリチュアリズムに多い論調であり、危険な思想であると脳大成理論では警笛を鳴らします。

確かに、「その日だけ」しか考えないならその言い分も正しいかもしれませんが、しかし、その努力は「その日だけ」のためにしているものではありません。その努力は、あなたを目指す未来のために行っているのです。あなたがわざわざ作り出す苦難は、その日の快樂のためではありません。その日の快樂だけを求めるなら、このような辛い努力は確かに無意味ですが、未来に描く自分の理想のために、今の苦しくも辛い努力をすることの意義はあなたも分かるはずです。

「その日だけしか見えない人間」が間違っているということが、このような短い時間軸でなら容易に明確に理解できることと思います。

これをもっと長い時間軸で考えると、かたよったスピリチュアリズムがいかに危険な思想かが分かってきます。

脳大成理論 1-21

つまり、私達が努力をするのは今世のためだけではないということです。『私達の意識や魂は肉体から離れても次の肉体に受肉して生き続ける』という宗教上でいうところの「輪廻」や「生まれ変わり」という視点があるからです。

人道的に反することに対する抑止力も同じ視点です。誰も分からなければいい、誰にも迷惑をかけなければ別にいいじゃないか、という意見に違和感を覚えるのは私達の本質的な善からくるものです。

確かに「輪廻」や「生まれ変わり」がないならその場だけ良ければいいのでしょうか。しかし、多くの哲学思想や宗教思想でハッキリと示されているように、私達の意識や魂はもっと長い時間軸で続いていくものなのです。また、意識や魂の輪廻という視点でなくとも、次世代の子ども達を始め、次なる世代へ良き世界を残していくという視点だったとしても同じです。

つまり、かたよったスピリチュアリズムは、「唯心論」に見えても、実際は「唯物論」なのです。

「私達は幸せになるために生まれてきたんだ。だから楽しむんだ。ありのままがいいんだ。わざわざ苦しんだり、辛い思いをするくらいなら人生を楽しんだほうがよっぽどいいんだ」という思想は、根本的には唯物論なのです。

前述の「その日だけしか見えない人間」と同じなのです。つまり、肉体は輪廻しない。だから先のことを考えたって無駄だ。今を楽しめばいいんだ。ということを行っているのです。

私達は、私達の日々を、私達の人生を、「全体」という視点から見なくてはなりません。

私達は全体から見て成長とは一体何かを考えなくてはなりません。

全体から見ることで、苦しみの価値、愚かさの価値というのが見えてくるのです。

苦しかったとしてもそれが未来を創る基盤となる。愚かな自分がいたとしても、それが未来のより良さにつながっていく。そういった視点です。

「脳大成理論の手引き1-1」で示したように、神＝宇宙＝潜在意識＝全体・完全であるならば、神＝全体です。

全体から見るということは神の視点から見るということを意味しているのです。だからこそ、私達はデータフィールドのレベルを上げ、より俯瞰して客観的に対象を捉えられるように脳を活性化させ、自己の拡大を行っていくのです。具体的な目的地は、それを達成した後がない場合燃え尽き症候群となってしまいます。私達が目指す方向、目的地は向かうがたどり着くことがない目的地である必要があるのです。つまり、「善・親切・可能性」です。そして「善・親切・可能性」を集約すると、『愛』になるのです。

神は愛を知らないのです。なぜなら、全体だからです。愛には対象が必要です。全体は、対象が存在しません。だからこそ、愛を知ることができないのです。仮に神・全体が愛を知っていたとするなら、私達が愛を学ぶことは必要としません。

脳大成理論 1-21

愛は、自分のためにというものではありません。愛は自分ではない誰かである他者が対象です。

そして愛するその前提は、確立された個人である事です。

個が明確に確立されていなければ、対象を明確にすることができません。だからこそ、まずは自己の確立なのです。脳大成理論でいうところの、依存から脱却し、自立することなのです。自己哲学をしっかりと確立することによって「個」が確立されるのです。愛を学ぶのはそこからなのです。

個である前提は、自由である事です。そして、言われたからやるのではなく、自らの意志である事です。もし義務的なものであれば、それは本質的な愛ではありません。

また上記の視点から真の愛を考えた時、自分の大切な人を愛して真の愛と言えるでしょうか？それはすでに大切な存在なのですから、むしろ愛して当然だと言えます。真の愛とは敵を愛することなのです。あなたの気に入らない人を愛することです。あなたを迫害するものを愛することです。個の対象である他者を愛するとは、そういうことなのです。

シュタイナー心理学では「自分とは意識魂である」と定義しています。

シュタイナー心理学でいうところの魂の定義は以下です。

- 1、自我が感覚魂として存在する = 受動的であり人間のいわば五感を司る知覚活動の源泉
- 2、自我が悟性魂として存在する = 自我（超自我）、主体は社会的
- 3、自我が意識魂の中で生かされる = 主体はまだ魂として存在する
- 4、主体が霊的な在り方をとり始める = 霊我の成立

肉体	～物質界	肉体
エーテル体	～生命界	習慣
アストラル体	～魂界	感情
自我	～意識魂	思考

※この詳細は後述いたします。

つまり、その人があなたの目の前にいるということは、その人とあなたは集合魂であり、あなたの意識魂を高次に向かわせるために必要なものであるという考えです。

だから、その人を切り捨ててしまったら、全体という視点から捉えた時、あなたが成長する機会を自ら捨ててしまうことと同じなのです。

つまり個で考えるならば、トラウマを克服するのではなく、トラウマのあるままに生きていくということです。あなたがトラウマを抱えたまま生き生きとした人生を過ごしていると思えた時、トラウマがそこにやっぱりあったとしても、あなたはそのトラウマを克服したと言えるのです。あなたはトラウマに勝利したのです。

脳大成理論 1-21

仮にトラウマをまんまと消したとしましょう。

でもそこにあるのが『今までの人生 マイナス トラウマ』という日々にただすぎないなら、苦痛はないが、かといって喜びもない人生しか残らないというのなら、トラウマがなくなったことがどうだというのでしょうか。

苦しみがあるにもかかわらず創造的に生きていく、というのではなく、苦しみがあるがゆえに創造的になれるのだ、と思えたとき、あなたはその苦しみを超出したのです。

なるほど苦しみは相変わらずここにある。昨日と同じようにそれは苦しい。昨日と同じようにあなたの魂は血を流している。

でもあなたはその苦しみに勝ったのです。

自分だけのことを考えているなら、楽しい平穏な毎日だったとしても、大切な誰かが苦しんでいたならどうでしょう。その人の苦しみに寄り添うとき、あなたはただ幸せを感じていると自分をごまかすことができるでしょうか。

いや、できるはずがありません。

寄り添うことの厳しさとは、大切な人の苦しみとともに自分はなすすべもなくいるしかないという事実です。不公平な人生の理不尽の前にただ佇むしかないという過酷です。

なすすべもなくただ寄り添うことしかできない。

ただひたすらそういう毎日だったとしても、それにも関わらずやっぱり寄り添うしかないと寄り添い続けることができたなら、あなたはその理不尽を超えたのです。

あなたは人生の理不尽に勝ったのです。

不幸でもいい。病気でもいい。無力でもいい。あなたはよろめきながらでも歩けばいいのです。でも、人生に負けてはいけないのです。

敵だからこそ愛する対象となるのです。敵だからこそ愛せるのです。なぜなら身内は既にあなたは愛してるからです。そして愛するということこそが完膚なきまでに相手を屈服させることだからです。そして私達が善であらなければならない理由は悪を救い上げるためなのです。

善⇔悪 親切⇔冷淡 可能性⇔絶望感

私達が立ち向かうべきは、愛する対象は、善・親切・可能性の反対側です。

これをなし得るには高次の意識が必要です。ゆえに私達は感情に振りまわされてはいけないのです。感情が思考を作るのではなく、思考が感情を作らなければならないのです。知的生命体である脳を有している私達だからこそ目指せる目的地に向かいましょう。